

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」

第1回 次 第

令和2年7月2日(木)

17時30分～19時30分(予定)

三鷹ネットワーク大学

- 1 三鷹市長挨拶
- 2 三鷹教育・子育て研究所所長 三鷹市教育委員会教育長挨拶
- 3 三鷹市の現況の共有
「データでみる三鷹&市民参加とコミュニティ創生」三鷹市教育委員会教育部長
「三鷹市の教育施策」三鷹市教育委員会総合教育政策担当部長
- 4 「ウェルビーイング(幸せ)とイノベーション(変革)～これからの日本の教育と学校を考える」 日本大学文理学部教育学科教授 末富 芳氏
- 5 意見交換
- 6 事務連絡

【配布資料】

- ・「三鷹のこれからの教育を考える研究会」研究員一覧 (資料1)
- ・「みたかの教育」令和元年9月15日号 (資料2)
- ・「データでみる三鷹&市民参加とコミュニティ創生」 (資料3)
- ・「三鷹市の教育施策～コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育」 (資料4)
- ・「ウェルビーイング(幸せ)とイノベーション(変革)～これからの日本の教育と学校を考える」 (資料5)
- ・令和2年度開催予定(日程後日調整)及び関連資料 (資料6、7)
- ・リーフレット「コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育」(資料8)
- ・「三鷹市教育ビジョン2022(第2次改定)」 (資料9)

【次回開催】

開催日時： 8月5日(水) 15:00～17:00

会 場： 三鷹ネットワーク大学

テーマ： 個に応じた一人ひとりを大切にする教育について

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」

(第1回会議録要旨)

日 時 令和 2年 7月 2日 (木) 午後5時30分～7時30分

会 場 三鷹ネットワーク大学

出席者 貝ノ瀬 滋 (所長)、後藤 彰 (座長)、阿原 あけみ、緒方 一郎、木幡 敬史、
佐藤 量子、相馬 誠一、常盤 豊、林 寛平、宮城 洋之

事務局 三鷹市教育委員会事務局、三鷹ネットワーク大学

〈議事要旨〉

(注) この会議録は抄録であり、すべての発言が記載されているものではありません。

1 三鷹市長あいさつ・・・河村 孝市長

私が貝ノ瀬教育長と知り合ったのは、20年前、三鷹市第四小学校の校長先生の時で、先駆的に「開かれた学校」を目指し、取り組んでいらっしやったのが貝ノ瀬先生であった。池田小学校で事件が起きた時、こういうことが起きないようにコミュニティ・スクールで開かれた学校を目指すべき、地域の皆さんにも活躍していただけるような学校に変えていく、それができれば今回のような事件は未然に防げたのだと信念を持って語っておられたのが印象的であった。その後、清原市長の代になった時に、コミュニティ・スクール構想、小・中一貫教育が始まり、貝ノ瀬先生に教育長に就任いただき、コミュニティ・スクールを基礎とした小・中一貫教育構想を提唱し実施していった。

三鷹市はコミュニティ行政を進めていて、7つの住区で住民に頑張ってもらって成功しているが、新型コロナウイルス感染症の問題で高齢化の問題が大きくなっている。

その時に、スクール・コミュニティは地域を活性化させる大きな視点になるのではないかと考えている。平成18年からのコミュニティ・スクール構想が定着、発展して、次の展開にきている。コミュニティ行政も曲がり角に来ていて、新しいコミュニティ行政、スクールコミュニティを目指せるのではないかと確信している。非常に大きなパイオニアである貝ノ瀬教育長に期待している。その次の所を目指したい。それは、ITかもしれないし、小中がもっと近接した形をとることかもしれない。皆様から意見を伺い、ぜひ、挑戦して欲しい。皆様には、とんがった意見を出していただきたく、これからの市政の展開、教育の展開にむけて我々が知らないことをぜひ話していただき、提言いただきたい。

2 研究所長あいさつ ……貝ノ瀬 滋教育長

「これからの三鷹の教育を考える研究会」は、2年間に及んで皆様方に委員をお願いした。私は、7年間三鷹市を留守にしていたが、確かに10年前では全国でのロールモデルであった。しかし、近年、社会も変わり、三鷹の状況も変わってきており、基盤の上にもっと進化していく必要がある。職員だけの議論でなく、皆様のような様々な分野でご活躍の方々に、

こんな学校、教育があったらよいなという意見を率直に出していただき、それを参考にして三鷹のこれからの教育を考えていきたい。

誰もが大切に出来る学校、社会を目指していきたい。ひとりひとりを大切にする個別最適化とスクール・コミュニティをさらに発展させていきたい。皆様には、理想を語っていただきたい。本当にひとりひとり、具体的に実現できる学校、教育、社会を到来させなければならない。それぞれ個性があって、育つ環境が違って生きているが、個々に十分留意した学習、学びが、組織体としての学校がどのようにあればよいか。学校は、子どもたちのためだけにあるのかということも同時に考えたい。既成概念を払って自由闊達に発言いただきたい。

3 研究員紹介 (略)

4 座長の選任 (略)

5 データでみる三鷹&市民参加とコミュニティ創生……秋山慎一教育部長

(三鷹市人口、世帯数、予算規模、税金、教育関係予算、職員数、教員数、児童、生徒数、三鷹市の人口構造について、小中学校数の説明があった。)

人口は増加傾向にある。転出世代をどうしていくかが課題である。児童数は2023年まで増加し、生徒数は2028年でピークを迎える。人口ピラミッドは少子高齢化が進み、棺桶型となっていく。

市民参加とコミュニティ再生、創生を進めてきた。7つの住区で、一時はうまくいっていたが高齢化が進む中、問題が出てきている。

1960年代は、市民参加で市民会議、1970年代は、市民参加でコミュニティカルテなどを行い、長期計画案検討市民会議を開催し、市の計画に反映させていた。1990年代は、「みたか市民プラン21会議」を行った。2000年は、参加と協働が日常化し、無作為抽出された市民とワークショップを実施。そして、今年から市民参加の新たな取組として、市民と協働して地域課題を発見して解決していこうとしている。コミュニティ創生に向けた具体的な取組として、2004年から「地域ケアネットワーク」、2010年から「がんばる地球応援プロジェクト」、そして、2020年「コミュニティ・スクール」から「スクール・コミュニティ」へと進めていく。これらのことを念頭に協議をいただきたい。

6 三鷹のこれまで教育施策「コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育」

……松永 透総合教育政策担当部長

三鷹市の教育政策について説明する。学校自由選択制は実施せず、三鷹市自治基本条例第6章第33条でも、「学校を核としたコミュニティづくりを推進」と謳われていた。平成18年、コミュニティ・スクールは、地域の力を結集し、子どもを通わせたい学校・学園を協働して作ろうと始まった。にしみたか学園をはじめに、コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育を現在まで実施している。「三鷹市教育ビジョン2022」では、「人間力」・「社

会力」の育成を目指し、5つの施策目標と20の重点施策を掲げている。三鷹市の児童、生徒数は前述どおり。三鷹市のコミュニティ・スクールの機能は、「学校運営への参画」と「教育活動への参画」の2本立てである。学園に「支援部」、「広報部」、「評価部」を置いている。

最近の三鷹市の教育に関する政策では、「小・中一貫型小学校・中学校とする」、「学園単位の学校運営協議会とする」、「小・中一貫カリキュラムの改訂」を実践している。

今、なぜ、小中一貫教育なのか、ということに関しては、三鷹市の9年間の小・中一貫教育の成果としての「15歳の姿」を共有。「確かな学力」「人間力」「社会力」を培っていく。小・中一貫教育は手段であり、目的ではない。三鷹市は、品川区とよく比較されるが、施設ではなく、ソフト面に力を入れている。

令和5年の新三鷹市教育ビジョンの構想に向けて、これまでの実績を「継承」し、さらに「進化」をして、進化後のゴールをイメージしていきたい。重点として、「ひとりひとりに応じた教育」、「ICT環境や先端技術の整備と活用」、「誰一人置き去りにしない教育」、「三鷹の地域ぐるみの教育」を進めていきたい。具体的には、「個別最適化された教育の実現」、どうすればオーダーメイドの教育ができるのか、「スクール・コミュニティの創造」、学校を核とした地域づくり、住民協議会と学園区が同じではないので、どうすれば一元化していけるのかを考えていきたい。また、放課後子ども教室、学童保育等の他の様々な取組みとも一体化した運用ができるとよいので、そのような点も考えたい。

7 「ウェルビーイング（幸せ）とイノベーション（変革）～これからの日本の教育と学校を考える」……………日本大学文理学部教育学科教授 末富芳氏

これからの日本の教育と学校を考えるには、ウェルビーイング（幸せ）と、イノベーション（変革）の2つを系統立てて設計していくことが重要である。

その前にまず三鷹市の状況に即し、いままでの研究成果から小中一貫が上手くいくためには、自治体の小中のネットワークの形成の戦略性が大切であることを指摘させていただく。杉並区は上手くいっていないが、相模原市はたぶんうまくいこうという見通しがある。杉並区は、小中の連携がうまくいっていないが、相模原市は、中学の先生が小学校に学びに来て、下の接続を意識していること、また、小中の組織の間でのリーダーシップについて、小学校だから下なのだという意識なのではなく、リーダー校を小中持ち回りにすることで小中管理職の誰もがリーダーとして同じ立場にあるという意識づけをしている。学校運営協議会と、管理職との相対的な権力関係が、小中一貫教育への地域コミュニティの許容度を決定している。

また地域コミュニティの中で、スクール・コミュニティを考えることが大事である。

児童生徒の個別最適化については、個票のデータ構築をはずして語ることはできない。中国、韓国を含めたアジア諸国から遅れを取っている。教員のペーパーワークは科学的でも合理的でもない、ICTを活用すべきである。箕面市の事例は、児童生徒の個票データを用い、一人ひとりの児童生徒の「成長」を見守って、必要な時に必要な指示を行えるようにし

ている。教職員、行政職員も異動していくので、一貫して子どもたちを見ることができるのは、ICTが力になる。そして、地域の力、ネットワークが関わりながら支援をしている。

教育のイノベーションを起こすことが必要な時代であり、その時は、予算を学校で活用していく等、リーダーシップが不可欠である。オーストラリアのクイーンズ州の小学校長会のスローガンに、「Optimism and Innovation」（意識すると、失敗してもいいからやってみようぜ）が掲げられていて、日本では考えられない挑戦的な姿勢である。

2018年4月のオーストラリアの校長が日本に来た時に、一番不思議に思ったことは何か？それは、「Why hand writing?」＝「なぜ、紙に手書きなのか?」ということであった。オーストラリアでは、5年以上前から、一人一台のタブレット化が進んでいる。多様なイノベーションの形を考えていて、日本人の副校長を登用、「教室」の概念を変えていくこともして、子どもたちがリラックスしながら学ぶことを教員が重視している。

日本の教育のイノベーションは世界的にみても後進国である。格差是正をしていない。それは、PISAスコアからも読み取れる。日本は、貧困政策もエリート政策も成功していない。

リーダーシップの視点でいくと、女性の校長が圧倒的に少ない。また、若い校長も少なく、教員のキャリアトラックを大胆に変えていくことも必要である。また、予算も不足している。日本の2018年のPISAの読解力スコアはコンピューターベースドテスト（CBT）への移行もあり下がった。特にCBTでデジタル機器を用いた場合、厳しい状況にある女子の読解力が低い。デジタル化から取り残されているといえる。また、児童生徒が幸せと感じる幸福度が低いということが差し迫った課題である。この状況を「変革」することが、日本における教育のイノベーションであると考えている。

その中核にあるべきなのが、ウェルビーイングである。子ども・若者が幸せである、ここにもいいんだと思える、三鷹が大好きだという状態になっていくこと、つまり、ウェルビーイングを大切にしたい。

Z会の記事にあるが、OECDのラーニングコンパスのゴールもウェルビーイングである。そのために、新しい学びをつくる、それが世界的な共通理解である。

そのためには、学校の「コリをほぐす」ことがポイントである。ウェルビーイングの優先順位は、イギリスに学ぶべきである。イギリス政府の教育政策では、「子どもと若者の安全とウェルビーイング」が最優先であり、そのためにケアも重視し、安全を大切にする学校がウェルビーイングにつながるという施策を取っている。PISA2015の生徒質問調査の結果、日本は、テストが難しいのではないかと不安、友達が出来るかどうかが不安である。

例えば、学校の中に、居場所カフェをつくり、地域の人と一緒にいられるなどの取り組みは有効と考えられる。中学校段階では西東京市で取組が始まっているが、こういう場所を増やしていくことも必要である。静岡の事例は、学校の外に居場所をつくっている。

日本の問題点は、1960年代以降、子ども・若者の意見表明の権利を剥奪してきたことである。子どもたちは未熟でもよいので、声を聞いて、できないことは一緒に考えるということがないのが日本はよくない。

なぜ、教員が、子ども・若者の本音と遠ざかっていくのか？学校における liberty、

Democracy、Creativity が後退してきている状況がある。だからこそ、学力、能力を根本的に解体していくことが必要である。

9月入学について、賛成の意見があったが、なんでも詰め込んでいる学校教育への叫びである。教育改革自体、新型コロナウイルス感染症の影響で、変革していく必要性を感じている。ひとつひとつの改善というより、目標自体を変えて、変革ストラテジーの問い返しが必要である。

若者も、傷ついてもよいから声を上げて、意見を言っている勇氣ある若者が増えている。大人の側も考えなければならない。

最後に、「三鷹市の教育委員会は社会や学校を教育を変革できるか？」は「三鷹市の大人の皆さんが自分自身を変革していけるか？」という問いを投げかけて終わりたい。

8 意見交換

○後藤座長 研究員の皆様から、ここまでの情報提供を踏まえつつ皆様のご専門の見地からこれからの三鷹の教育について、質問を含めてご意見を頂戴したい。

○宮城研究員 PISA 調査で日本の子どもたちがハピネスを感じているのが少ない。日本の子どもたちが自己満足度や自己肯定感が低いと以前から言われているが、末富先生が話されたウェルビーイングというのはPISA 調査のハピネスと同じ概念として考えてよいか？文化的背景、宗教の問題等で日本の子どもたちの自己肯定感や自己認識に影響しているのではないか？

○末富先生 国際機関、日本では内閣府の子どもの貧困調査の中でいくつかウェルビーイング指標を入れている。国や国際機関によって、いくつか考え方は異なるが、最低限の要素は衣食住である。日本の中で衣食住は先進国の中で悪くないように見えるが、それでも年間16.9%の子育て世帯は食料を買えない、衣食住も保証されていない。その他の共通の指標としては自己肯定感である。子どもたちが認められて安心できる、あるいは、スウェーデンだと先生や親が自分の言うことを受け止めて聞いてくれるか。大事な要素は他に、友人関係もあって、悪口を言われぬか、いじめられてないか、特に思春期の子どもたちにとって、友人関係はウェルビーイングの根本であるなど、いろんな指標の細かい作り方はある。

○後藤座長 ICTなども出ていたが、政策的な視点でのご意見もあればお願いします。

○常盤研究員 大学行政を長くやっていたのでその感覚でいうと、学生紛争の解決ができないままに今日ここに至っているのではないだろうか。学生が大学運営に全く参加しないというのは恐らく日本しかない。これは小中学校ももちろん問題なのだが、全体として教育界が学生とか生徒の位置づけに対して、十分な対応をしてきていなかったことがある。もう一つが、ICT化の中に個別最適化といわれているが、AIドリルとか、学力の数値を測れる部分の個別最適化という受け止め方が強いという印象を持っている。本当の個別最適化というのは何なのかということ三鷹市で考えていければと思う。また学校のコリをほぐすことも含めて考えると、コミュニティの力を使って、個別最適化を支援するようなことを考えていくことがとても重要で、そこを追求していくことがポイントである。

○後藤座長 コミュニティの力を活用するのが大事なキーポイントかなとも伺っているが、このあたりについていかがか。

○木幡研究員 大人から大切にされていると感じることと、友人関係が大事である。今の子どもたちは友達作りが大変で、労力をかけないと友達に出会えない。人間関係を構築することが大きな関心事で、大学も何らかのそういう場を作らないといけないというのが現状。人間関係や相手との信頼関係を構築できるかということもとても大事である。意見を包含して、何かを作り上げていくようなタイプの内容の授業をしても、安心して議論ができ、それから成果を出すのだという信頼関係は、大人に何か認められた経験が大事になってくる。人間関係が非常に重要で、だからこそ個別にみていくということである。個別最適化もいろんなポートフォリオが出てくるが、レイヤーの違う個別最適化について考えている。

三鷹といっても7つの地域があり、全体では人口は増加しているが、7つの地域をみると、中央線と井の頭線沿線だけが増えていて三鷹のチベットといわれる大沢地区はどうなんだと。7つの地域において人のマインドや定住するという感覚も違う。教育コンテンツや考え方も、子どもたちにどういうカリキュラムや時間、ICTの使い方などを提供していくかは、三鷹市として大枠だけ決めておいて、7つの地域の特性に合わせ最適化する。一律ではなく、それぞれで決めて、お互い協調し、参考にしながら成果を出していくというのが、三鷹のこれまでの特性を合わせた次の発展系になるヒントがあるのではないか。

○後藤座長 重要なキーワードがたくさんあった。「コミュニティの力」「大人から大切にされている信頼感」「三鷹の教育の中では7つのルール」など。

○林研究員 「〇〇力」という力んだ感じだけではなく、力を抜くことも必要なのではないか。学校が力みすぎていると、居心地が悪くなったり、いつも頑張らなくてはいけないという風になる。私はスウェーデンの小学校で教員をしていたが、まさに学校の職員室にはカフェがあって、そこでは先生達はくつろぎながらいる。新設の学校には子ども達にもそういうスペースがある。

新型コロナウイルス感染症の状況で在宅学習が増えてくると、学校に行くということも概念として変わってくる。これから、学校や教育というものを根本的に見直す必要があるだろう。例えば我々は、紙とペンで何かを書くということをやわざ教育方法として研究したりしない。だが、一人一台ノートパソコンが来るということになると、ノートパソコンを使って何をするかということをお話したりするが、紙とペンだと思えばいい。あるのが当然でその中で何をするか。そのツールの研究をいくらやってもビジョンは出てこない。向こう5年ぐらいであれば想像できるかもしれないが、その先の数十年をみたときに、学校は、一つはバーチャルコミュニティができてくるだろう。リアルコミュニティに対して、子ども達はすでにオンラインゲームなどで世界中とつながっている。入力できない子どもでも音声入力を使っているし、それを自動翻訳してお互いゲームをしたりしている。そういうことを考えるとリアルコミュニティとバーチャルのコミュニティが併存する社会が生まれる。その時にいかに学校に愛着をもってもらい、関係を維持してもらおうかということをお話する必要がある。その時に、力んで緊張している学校に、愛着がもてるかと考えると、学校はもう

少し力を抜いてもよいのではないか。

○後藤座長 コミュニティのキーワード、力を抜くということが出てきたところだが、心理的にはどうだろうか？

○相馬研究員 データそのものを見て、マイナスのデータがないということが問題かと思う。つまり不登校の数がどのくらいなのか、いじめの状態がどうなのか、学力意欲がどうなのか、課題が見えてこない。ネガティブな要素を全面的に出して、これをどのように克服していくかということを考えていかななくてはいけない。データの出し方も、例えばその現状はわかっているが、これから先どうなるのか。いわゆる棺桶型（三鷹市人口ピラミッド）と言われたが、だんだん逆ピラミッドになる。それは当然、福祉なり医療問題にかかわってくる。それにいわゆる教育とのバランスをどうやってとっていくのかということを考えていかななくてはならないだろう。

それから、性別年齢別純移動率は、例えば 30 代から 60 代までの転出はどこに行っているのか。なぜこの人達が三鷹を捨てるのかということを追跡していけば、三鷹の魅力はこれからどこにおけばいいのかということが出てくる。ある面ではこういう人達が一番大事なターゲットで、この人達を定住してもらうことによって税収にも伴ってくるのではないかなという気がする。人口減少というのは、黙って見てもだめで、具体的に教育するならばここだという感じで、そこに予算もかけていく。例えば7つの学区そのものが、不登校なり、学力の状況なりを見て、落ちているところには力を入れていかななくてはいけない。それをターゲットにしながら、どういう様な施策を組むことによって伸びていくのかということを考えていけると思う。先ほどの話にあったカフェなどは7つの学区全部に置いてみるといい。不登校の子ども達には、例えば相談したいと思っても土曜日、日曜日に相談できない。虐待を受けている子どもたちが相談したいと思っても夜間はない。自殺念慮を抱えている子どもは命の電話はあるが、相談すらできない貧弱な体制である。例えば、この7つの状況の中で、すべてに相談機関、夜間、土日も開いていくとか、そこにカフェを作ってみるとか。私は、教育の一つの姿が十五の姿ではなく、二十歳である。ここで育った子どもたちが、ここでまた子どもたちを作り、税金を納めていく。そういうような形で教育を考えていかななくてはならない。

○後藤座長 課題をデータの根拠から見出すことが大事で、その解決方法が三鷹の教育の売りになるのではないかとこの貴重なご意見を頂戴した。

○緒方研究員 私は、教育の専門家ではなくて芝居などをやってきた。今回のウェルビーイングについて、結果としていま幸せだということの前に、そこに行くプロセスというのが、実はエンターテイメントのところにはある。その時劇場でとか、ライブでという前の準備、稽古とか、やり取りというところにすごく生きがいあったり、達成感があったり、お互いの個性が出てくる。そういうことも含めてウェルビーイングに行くプロセスもぜひ大事にしたいと考えている。今の子ども達になりたいものといったら「ユーチューバー」だというのが、「ユーチューバー」そのものが目的となると悲しい。三鷹にはよい素材があって、国立天文台や、JAXA や航空研、船研、ジブリもある。杏林大学もある。医療でも天文でも宇宙でもア

アニメでも、子ども達が具体的な夢を描けるようなところを教育の中に取り組みたい。基礎的な研究で三鷹光器の観測機器があり、地球上を回っている衛星の相当数を三鷹光器で作っている。宇宙飛行士や技術者など、もっと具体的な夢を描けるような素材がいっぱいあるので、それとの絡み合いを、ぜひ教育の場で実践をしていただければと思う。

○後藤座長 子ども達の夢のためには、三鷹には様々な環境があり、しかもその環境の中で子ども達が力を抜いて学べるという貴重なご意見をいただいた。

○佐藤研究員 私は知的障がい者と精神障がい者の施設に携わっており、相談に来られる方も利用される方も男性が多い。スクールカウンセラーもしているが、小学校も中学校も高校も、相談室を利用するのは男の子が多いのと、先生方が実際に対応に困られているのも男子が多い。そういうことで、非常に女子が取り残されていると感じている。今対応に困っていて手を差し伸ばせる子はよいのだが、困っているということと言えない女の子がたくさんいて、その方が30代、40代になった時に、お母さん方が非常に高齢になって、それで施設の方へ初めてつながるというケースがすごく多い。末富先生のお話の感想になるが、特に女子が取り残されているということが、読解力が低いということであったのかと思います、非常に勉強になった。

○後藤座長 相談に関して、相談しやすい雰囲気というのはなかなか子ども達には伝わらづらいところがある。本当にそういうところは、どう教育ビジョンの中で用意していくかという、貴重なご意見であった。

○阿原研究員 私は一保護者として、子どもの通う一中のPTA会長として感じていることをお話したい。私は四小でもPTA会長をしていて、私自身が四小と三中の卒業生で、ずっと三鷹で育って三鷹で大人になった。私たちが子どもの時よりも、不登校児童が多い。本当に小学校、中学校時代は何も考えずに楽しく学校に通える宝物のような時代なのに、いろんな日常があるのはわかっているが、学校に行けない子ども達をどうにかできないのかということはずっと思っている。私には子どもが4人いるが、みんな楽しく学校に通うことができた。ただ、中学3年生の子どもの友人が学校に通えず、ラインで「特別教室に通っているのよ」というようなことを言っていると聞いた。特別教室だけでなく、保健室に登校している子もいる。そういうことを聞くと、学校には行けるけれど、教室には入れない。そこに何かがあるんだろうと思う。勉強ができないとか、そういうのではないのに、クラスのみんなと授業が受けられないことがすごく残念で、たまたま、今回コロナの影響で学校が自粛になっているときに、大学生二人の娘と高校生の息子がオンラインで授業をしているのを見て、こういう風に学校に行って違う教室で先生が行っている授業を、どこか学校の中で聞けたならば登校として認めてもらえるようになればと思った。不登校は、登校として認めてもらえないので登校日数がゼロになってしまう。そうではなくて、学校に行けて、その場でみんなと一緒にしないにしろオンラインで授業が聞けるという環境ができたならば、その子たちにとってどんなにいいのだろうかということをしごく思っている。子ども達に一人一台の端末が配られるということが見えてきているので、やはりそういうところも改革して、学校に行けない子ども達がどうにかして学校に行けて、通えているという実感

が湧くのではないか。今高校受験で無遅刻無欠席だと内申プラス1がつく、事実そういう学校が多い。そのプラス1をもらうために、具合が悪くても学校に行ってしまう。休むに休めない子どもがすごく多くて、そういうのも見ているのもつらい。「無理にいかないでいいよ、1 ぐらいだから、体が大事だから休んだら」といっても、「頑張っていかなきゃ」と、そういうストレスが子どもにあるのではないかと思っている。子どもが幸せだと感じて学校で過ごせること、早い子では高校出たら働きに出なければいけない、子どもでいられる時間は、大学を出ても22歳なので本当に少ない。大切な学生生活、子ども時代をどうにかして楽しい子ども時代だったと思えるような三鷹の学校づくりになれたらよいと心から思っている。どうかそういうことに向けて三鷹市で働いてくれたら有難い。

○後藤座長 学校は宝物。いいキーワードをいただいた気がする。その宝物を守り磨くのは誰かということになるかと思いますが、ICTを使った中で子ども達が振り返るときに、ICTで授業を振り返れたらそれは面白いかなと私も聞かせていただいた。次回に向けてたくさんのキーワードをいただいた。

○末富先生 大人が力まない。例えば三鷹のおすすめのお菓子を持ち寄ってお茶会形式など行ってもいい。

○教育長 末富先生ありがとうございました。また、皆様適切なお意見もいただきありがとうございます。これは蓄積していき、2年間ですのでよろしく願います。今、市長の本をお配りしている。自分が在席中には配らないように言われていたので。個別最適化をするなら一人一台のタブレットが必要だろうと、12,500人の子どもに一人一台配ることを決断して、12~13億円の支出になるのですが、市長が決断してくれた。次回もよろしく願います。

9 事務局から連絡

○鈴木施策担当課長 次回の開催日程8月5日(水)15時から17時、三鷹ネットワーク大学にて。3回目以降の開催は、後日、日程調整表を事務局から送る。